

終助詞「ね」と丁寧さとのかかわり

佐々木泰子

要 旨

終助詞の「ね」は、日本人の談話で多用される。終助詞の「ね」について、辞書には、「詠嘆、念押し、同意を求める気持ち」などの記述が見られる。

しかし、終助詞「ね」の使用には、上記用法のほかに談話における「丁寧さ」とのかかわりがあるように思われる。小論では、まず、類似した分析視点を有する主だった先行研究をサーベイし、次いでテレビの談話分析とアンケート調査を行い、終助詞「ね」が親しみをこめた丁寧さの働きかけをしていることを明らかにする。

【キーワード】 終助詞「ね」 話し手 聞き手 情報 丁寧さ *Politeness*

はじめに

終助詞の「ね」について、辞書には、一般に、「文の末尾に用いられて、①詠嘆（感動）を表わす。②念を押す気持ちを表わす。③相手の同意を求める気持ちを表わす。」などの記述がみられる。^{#1)} また、代表的な文献の一つ『現代語の助詞・助動詞』（国立国語研究所）には、終助詞「ね」の意味として「①軽い詠嘆の気持ちを含む判断。②軽い主張、念を押す気持ち。③同意を求める。返答を促す。④質問、詰問。」などがあげられている。

しかし、終助詞「ね」の使用には、上記用法のほかに談話における「丁寧さ」とのかかわりがあるように思われる。以下では、まず、類似した分析視点を有する主だった先行研究をサーベイし、次いでテレビの談話分析とアンケート調査を行い、どのような局面で終助詞「ね」が丁寧さとのかかわりを持つのかを明らかにしたい。

1. 先行研究の概要：サーベイ

辞書や標準的な概説書の説明とは別に、終助詞「ね」が対人関係に果たす役割に注目した研究がいくつかある。それらは、大別して、「ね」を①構文的観点および話し手と聞き手の関係からとらえたもの、②話し手と聞き手と情報の三者の親疎関係からとらえたものに二分されよう。

① 構文的観点および話し手と聞き手の関係からとらえたもの

第一のグループに属すると考えられるものには、時枝（1951）、渡辺（1953）、芳賀（1953）、佐治（1956）、上野（1972）、鈴木（1976）などの研究がある。

これらの研究に共通しているのは、陳述に関する意見の相違（時枝は終助詞に陳述の働きを認めないが、渡辺は認める等）や、分類の方法に差（渡辺は終助詞を構文的職能によって分類しているが、佐治は接続の仕方によって分類している等）が認められるものの、「ね」は概して聞き手に対する親和的な働き掛け、配慮をする助詞だという理解である。

また、近年のモダリティ研究の立場から、益岡（1991）は、終助詞「ね」は、文を伝達する際の話し手の聞き手に対する態度を示す「伝達態度のモダリティ」を表わすとしている。また、「伝達態度のモダリティ」の特性は聞き手に対する話し手の顧慮という点にあるとしている点が注目される。

② 話し手と聞き手と情報の三者の親疎関係からとらえたもの

先行研究のもうひとつのグループに属すると考えられるものには、神尾、大曾、陳、森山などの研究がある。これらの研究は小論との関わりが深いと思われるので、少し詳しく説明する。

②a) 神尾は『情報のなわ張り理論』（1990）において、話し手または聞き手と文の表わす情報との間に一次元の心的距離が成り立つものとし、その心的距離は〈近〉および〈遠〉の二つの目盛りによって測定されるものとした。

また話し手は、自分が表現しようとする情報についての、なわ張り関係に応じて、文型を選択するとし、なわ張り関係に対応する文型を以下のようにまとめている。

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

〈例文〉

A：頭が痛い。

B：いい天気だねえ。

C：君は熱がありそうだね。

D：アラスカの冬は厳しいそうだ。

すなわち、聞き手に情報がある場合には「ね」は必須となり、情報が話し手と聞き手のなわ張りの内にあるときは直接形に「ね」がつき、情報が話し手のなわ張りの外にあって聞き手のなわ張りの内にあるときには、間接形に「ね」のついた形になるとしている。

②b) 大曾(1986)は、

「今日は金曜日ですね。」－「ええ、そうです。」

のように、「ね」は基本的には話し手と聞き手の間に同程度の情報、同じような判断、考えが存在するということを前提とするとしている。

②c) 陳(1987)は、伝統的な国文法の終助詞の解釈は、ことがらに対する話し手の感情的な態度の側面だけをとらえるものであるとする。しかし、終助詞は聞き手の存在のなかで使われるものであり、その点から規定されないことには終助詞の特質を明らかにすることができないと考えた。そして、「終助詞は、話し手と聞き手のあいだの認識のギャップをうめることにかかわる表現手段である」と定義づけている。

ホント、悪質ね。

ご苦労さま、大変でしたね。

のように、「『ね』は、聞き手の方が認識の度合いが高いと話し手が考える情報について、聞き手の認識をとおして、話し手の認識を高めるために文にくっつけられるのが基本である」というふうに、聞き手とのかかわりを、話し手と聞き手の認識のギャップという観点からとらえている。

②d) 森山(1989a)は、「ね」のような終助詞は、

明日も雨だね。

彼も行くよね。

のように、聞き手の情報と話し手の情報が最終的に一致するという見込みがあるという情報伝達的な意味を持っており、話し手自身ある程度知っているという情報であり、かつ聞き手も知っている情報について、最終的に話し手と聞き手が共同理解にいたるという情報伝達過程であるとしている。

また、森山(1989b)は、話し手が発話しようとするに関する情報が本来的に聞き手に存在する(と話し手が仮定する)かどうか、そして、その聞き手の情報を話し手がどう遇するかということが重要であるとしている。さらに平叙文における「ね」は、当該発話に関する情報が聞き手にも存在するという話し手の仮定の表示(聞き手情報配慮の表示)であるとし、聞き手に理解・共感が可能だ

と仮定しての発話と言えるのかもしれないとしている。

以上のように、近年の「ね」に関する研究には、話し手と聞き手の関係だけではなく話し手と聞き手と情報の三者の関係から論じたものが多い。それは、話し手と聞き手を無機的なスピーカーとレシーバーとみなすのではなく、情報によって結ばれた有機的な関係として捉えなければならないことを意味している。これらの研究から、終助詞「ね」は、話し手と聞き手の情報の共有が確率的に仮定されていることが推測されるのである。

①および②の先行研究が示唆するところをまとめると、「ね」は、話し手の聞き手に対する親和的な働きかけ、配慮を示す助詞であり、話し手と聞き手の情報の共有を前提とする「共有知識のマーク」としての機能を有するものであるということになる。

II. 丁寧さとのかわり

次に、終助詞「ね」と「丁寧さ」とのかかわりについて考察する。Brown and Levinson (1986) [以下、B&L] に従えば、*positive politeness* (積極的丁寧表現) と *negative politeness* (消極的丁寧表現) が敬語行動の中心的モデルであり、丁寧さの上位概念に *politeness* がある。

positive politeness は、相手の *face* (面子) を喜ばせることを言って相手を積極的に認めたり、仲間とみなして話し手が聞き手に対して親密な行動をとることである。それに対して、*negative politeness* は、相手の *face* を侵さないような言い方をして聞き手にかかる負担を少なくしたり、聞き手が行動の自由を束縛されたと感じるのを減らすことである。

私達は一般に「敬語」という言葉から改まった場所で目上の人に対して用いる「聞き手を常にある間隔に置こうとする敬語表現」(時枝・1951)を連想する。それは、B&Lに従えば、*negative politeness* ストラテジーの *give deference* (敬意の表明) に含まれるものである。

一方、ここで扱う終助詞「ね」は、*positive politeness* に含まれるものと考えられる。*positive politeness* ストラテジーには、大別して

- 1) *claim common ground* (共通基盤を要請する)
- 2) *convey that S and H are cooperators* (話し手と聞き手が協力関係にある)
- 3) *fulfil H's want for some X* (聞き手の何らかの欲求に応える)

の三つがあるとされる。

前に述べたように、終助詞「ね」は話し手から聞き手への親和・共存的働きかけの表現であり、話し手と聞き手の情報の共有が前提とされ、共有知識のマークとしての機能を持つ。このような終助詞「ね」の働きは、*claim common ground* としてまとめられる 八つのストラテジーの一つである *use in-group identity markers* (同一集団標識の使用) に 対応するものと考えられる。*use in-group identity markers* とは「両者が同じグループに所属していることを喚起して、聞き手の友情、連帯を示すような表現の使用」である。一方、*claim common ground* とは、聞き手に関心を払っていること、聞き手と同じ仲間にいること、同じ考え、意見、態度、知識を持っていることを表明することを指す。

あいさつの言葉として日常的に使われる「今日はいい天気ですね。」という表現に含まれる「ね」や、意見を求められたときに、「やっぱり秋がいいですね。」のように使われる「ね」は、この文の内容には何ら影響を与えない「話し手の伝達態度を表わすモダリティ表現」である(益岡・1991)。ここでは、終助詞「ね」は「これは私だけの考えではありません」とか、「皆さんの考えと同じだと思いますけれど」という話し手のモダリティの表明であり、B&Lの言うところの「同一集団標識」として機能しているのである。

A) テレビの談話資料の分析

最初に、テレビの談話資料の分析を通して、終助詞「ね」の同一集団標識としての機能を確認しよう。テレビの談話資料の分析を行ってみると話し手の終助詞「ね」の後に、聞き手があいづちをうつ場合の多いことが分かる。分析の結果は以下に示す通りである。

〈資料1〉は、1992年 8月24日NHKで放映された全国高校野球夏の大会の準決勝第2試合の1回の表・裏、〈資料2〉は、1992年 8月26日テレビ朝日放映の「徹子の部屋」(「寛仁親王妃信子殿下の献立公開」)、〈資料3〉は、1992年 9月18日 NHKのイブニング ネットワークからのものである。話し手の終助詞「ね」の後の、聞き手の反応を調査した結果である。(「そうですね」「なるほどね」……などのあいづちに含まれる「ね」は、カウントしていない。)

〈資料1〉では、話し手である解説者とアナウンサーは通常画面に現れないので、音声のみが談話の前提になっていると考えられるので、動作によるあいづち(うなずきなど)は含まない。しかし、〈資料2〉・〈資料3〉については、〈資

料1>とは違い画面に話し手と聞き手が映ることが前提となっているので、テレビ画面から分かる範囲の動作によるあいづちも含めた。ここでは、あいづちを広義に解釈して、聞き手の受け答えや返事、うなずきなどの動作も含めた。

〈資料1〉

はい (18) はーはい (1)	(19)
そうですね (7) そうなんです (4) ええ、そうですね (3) そうでしたね (1) あ、そうですか (1) そうですよね (1) へへ、そうですね (1) そうですね (1) そうなんですよね (1)	(20)
ええ (13) え (1) えー (1) ああええ (1)	(16)
はあ (6) はあはあ (2) はあはあはあ (1)	(9)
うーん (3) うん (3)	(6)
なるほど (1) なるほどね (1) はーなるほどね (1) あーなるほどね (1)	(4)
あはは (1) ねえ (1)	(2)
	(76)

〈資料2〉

ええ (6) え (5)	(11)
うなずき (5)	(5)
はい (3)	(3)
うーん (2)	(2)
ねえ (1)	(1)
そうですね (1)	(1)
	(23)

〈資料3〉

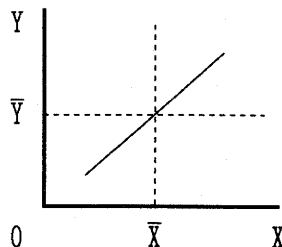
ええ (1) え (1)	(2)
そうですね (2)	(2)
はい (1)	(1)
うん (1)	(1)
うなずき (1)	(1)
	(7)

〈資料1〉

終助詞「ね」の出現回数 88回
終助詞「ね」のあとのあいづち 76回
 $76 \div 88 \times 100 = 86.4 (\%)$

〈資料2〉

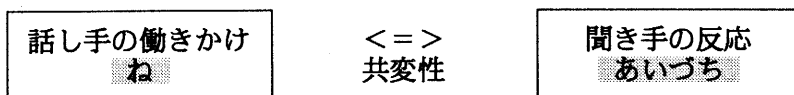
終助詞「ね」の出現回数 39回
終助詞「ね」のあとのあいづち 23回
 $23 \div 39 \times 100 = 59.0 (\%)$



〈資料3〉

終助詞「ね」の出現回数 9回
終助詞「ね」のあとのあいづち 7回
 $7 \div 9 \times 100 = 77.8 (\%)$

談話資料の分析から、高い確率で話し手の「ね」のあとに聞き手によるあいづちが打たれていることが分かる。統計的にみても、両者には正の共分散（グラフ参照）が認められるので、談話における「ね」の働きを、以下の図のように考えることができる。



あいづちには「『応』あるいは『賛成』ととられるものが多い」（水谷・1988）ことを考慮すると、あいづちという聞き手の反応を伴うことの多い終助詞「ね」は、話し手と聞き手の共有知識のマークとして機能していることが理解される。そして、B&Lの言うところの同一集団標識として機能し、談話に親和・共存的ムードを作り出していると言えよう。

B) アンケート調査の結果

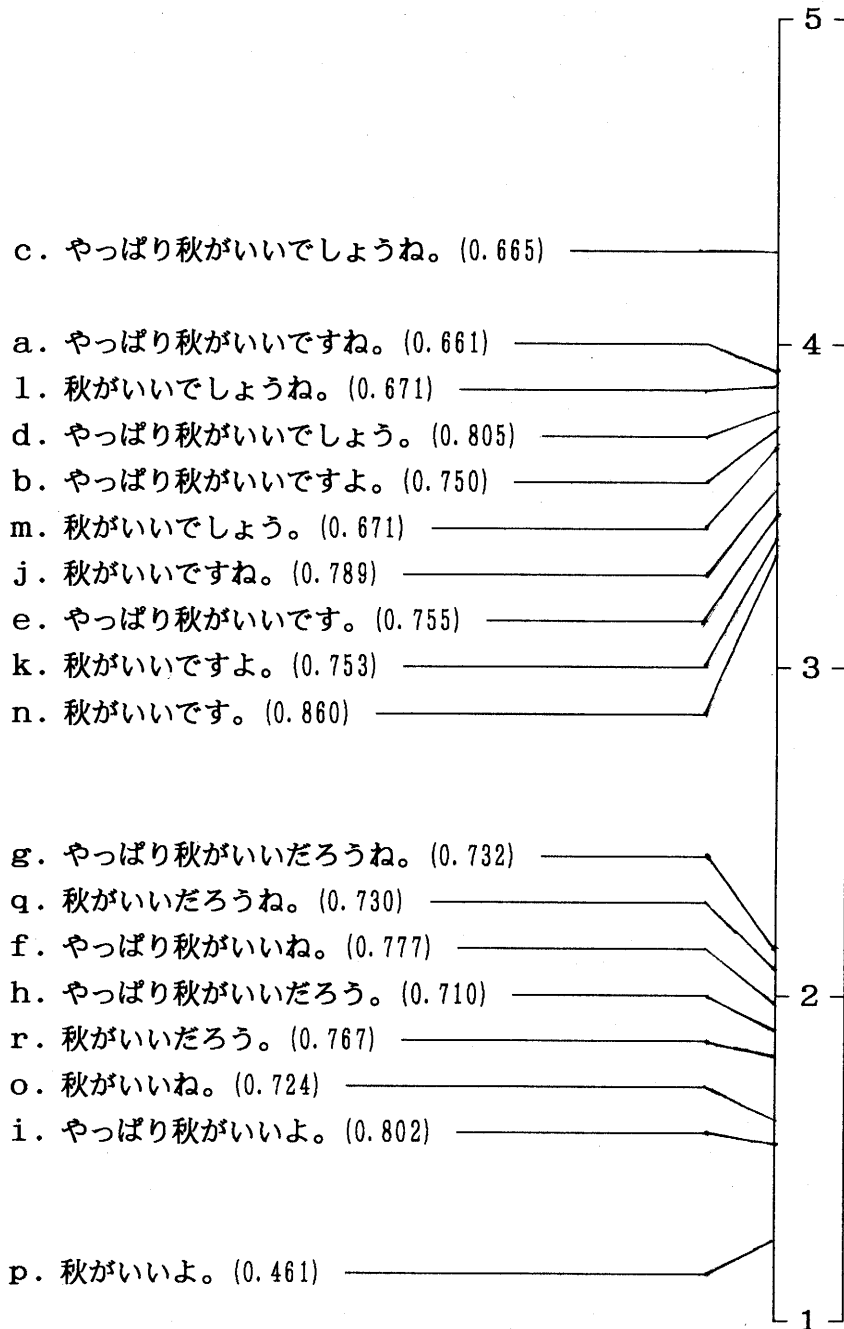
次に、終助詞「ね」と「丁寧さ」とのかかわりに関するアンケート調査の結果（詳しくは、本誌所収の川口との共同調査（1992）および佐々木・川口（1993）参照）を示そう。^{※2)}

調査は、『日本人とアメリカ人の敬語行動』（井出祥子他）で用いられた方法を援用し、日本人大学生123名（男性75名、女性51名）を対象に、1992年5月に行った。

「ヨーロッパへ行くとしたら季節はいつがいいですか。」の問いの答えとして、a～r（文末に「ね」を含むものと含まないもの）の答えを用意し、それぞれの表現の丁寧度を「最も改まった表現」ならば5、「最も気楽な表現」ならば1とする5段階のスケールを示し、それぞれの丁寧度に応じて、1から5までのいずれかに○を付けてもらうという方法で測定した。

結果は、以下に示す通りである。

表現の丁寧度の平均値と標準偏差



() 内は標準偏差

丁寧度は、大きく文末のデス体とダ体で分かれており、丁寧度を定める一次的な要因として先に述べた *negative politeness* のストラテジーが働いていることが理解される。「ね」のついた表現と同様の表現で「ね」のつかないものを比較すると、

やっぱり秋がいいでしょうね (4.277)	－	やっぱり秋がいいでしょう (3.795)
やっぱり秋がいいですね (3.945)	－	やっぱり秋がいいです (3.539)
秋がいいでしょうね (3.930)	－	秋がいいでしょう (3.703)
秋がいいですね (3.565)	－	秋がいいです (3.382)
やっぱり秋がいいだろうね (2.146)	－	やっぱり秋がいいだろう (1.892)
秋がいいだろうね (2.093)	－	秋がいいだろう (1.793)

() 内は丁寧度の平均値

となり、文末のデス体、ダ体のどちらにおいても終助詞「ね」のついた表現の方がつかないものよりすべて丁寧度が高くなっている。

また、対比されて論じられることの多い終助詞「ね」と「よ」の丁寧度を比較してみると、

やっぱり秋がいいですね (3.954)	－	やっぱり秋がいいですよ (3.757)
秋がいいですね (3.565)	－	秋がいいですよ (3.444)
やっぱり秋がいいね (1.971)	－	やっぱり秋がいいよ (1.595)
秋がいいね (1.657)	－	秋がいいよ (1.225)

() 内は丁寧度の平均値

となり、終助詞「ね」の方が丁寧度が高くなっている。

以上の結果から、日本人大学生を対象にした調査においては文末に終助詞「ね」を付けることによって表現の丁寧度が高められることが確認された。

Ⅲ. まとめ

小論では、まず先行研究をもとに終助詞「ね」の意味用法を検討し、それらによってなお埋められていない空隙に B&L の *politeness* の枠組みを適用し、終助詞「ね」と丁寧さとのかわりを説明しようとした。そしてテレビの談話資料の分析から終助詞「ね」の同一集団標識としての機能を確認し、語用に関する

アンケート調査によって終助詞「ね」が丁寧度を高める働きを持つことを示した。日本語の談話では、終助詞「ね」を使うことによって、聞き手に対し親しみをこめた丁寧さの働きかけをしていると言えよう。

また、「ね」以外の終助詞にも対人関係を構成する働きがあるとするならば、終助詞一般を正しく理解して使えるように指導することは、日本語学習者にとって日本人とのコミュニケーションを高めるうえで不可欠な要素になってくると考えられる。ただしそのような仮説を検証するためには、この小論のパーセクティブを超えて、たとえば終助詞「ね」の使えない局面（話し手の直接体験、命令表現など）を明らかにし、さらに他の終助詞についても同様の調査を進めることが必要であろう。

<注>

- (1) 講談社『日本語大辞典』、三省堂『大辞林』、『新明解国語辞典』、『現代国語辞典』、岩波書店『広辞苑』等、参照。
- (2) 佐々木泰子・川口良 (1993) は The 4th Conference on Language Research in Japan, Nov. 14, 1992, 国際大学 (広尾) における報告論文。

<参考文献>

- Brown, P. and Levinson, B. C. (1978, 1987), *Politeness*, Cambridge University Press.
- 陳常好 (1987), 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』, 6巻10号.
- 芳賀綏 (1953), 「陳述とは何もの?」『国語国文』, 23・4.
- 井出祥子他 (1986), 『日本人とアメリカ人の敬語行動』, 南雲堂.
- 神尾昭雄 (1990), 『情報のなわ張り理論』, 大修館書店.
- 益岡隆志 (1991), 『モダリティの文法』, くろしお出版.
- 水谷信子 (1988), 「あいづち論」『日本語学』, 7巻13号.
- 森山卓郎 (1989a), 「文の意味とイントネーション」『講座 日本語と日本語教育 1』, 明治書院.
- 森山卓郎 (1989b), 「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報非配慮の理論—」『日本語のモダリティ』, くろしお出版.
- 大曾美恵子 (1986), 「誤用分析 1 『今日はいいい天気ですね。』—はい、そうです。』」『日本語学』, 5巻10号.
- 佐治圭三 (1956), 「終助詞の機能」『国語国文』, 26・7.
- 佐々木泰子・川口良 (1993), 「副詞「やっぱり」と終助詞「ね」の習得に関する研究—待遇表現上の機能を中心として」, *THE LANGUAGE PROGRAMS OF THE INTERNATIONAL UNIVERSITY OF JAPAN: WORKING PAPERS*, Vol. 3 (forthcoming).
- 時枝誠記 (1951), 「対人関係を構成する助詞・助動詞」『国語国文』, 209.
- 上野田鶴子 (1972), 「終助詞とその周辺」『日本語教育』, 17.
- 渡辺実 (1953), 「叙述と陳述—述語文節の構造—」『国語学』, 13/14.